The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ライバルから共闘へ : ウォートン作品における姉妹描写の変遷 |
| Author(s) | 吉野, 成美 |
| Citation | Osaka Literary Review. 2017, 55, p. 21-33 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/60622 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# ライバルから共闘へ
## ―ウォートン作品における姉妹描写の変遷[1]

吉野　成美

1868年に発表されたルイザ・メイ・オルコットの『若草物語』は、19世紀後半のアメリカで、ごく平凡な10代の少女たちがこの時期にありがちな己の物質的私利私欲と葛藤し、時には周囲の誘惑に翻弄され、失敗をしながら、最終的には母親が導き手となって貞淑で思慮深い大人の女性へと成長していく物語である。執筆からわずか二か月あまりで完成、そして出版され、「たちどころに子供たちの心をわしづかみにした」この作品は、現在でもアメリカを代表する児童文学の書としてあまりに有名である（Rhys　xiv）。そして、この小説の出版当時、まだ6歳の少女だったイーディス・ウォートンも、「みんな読んでいるから」という理由で、厳しかった母親に「しぶしぶ」読むことを許してもらえたとその回顧録 *A Backward Glance* で記している（822）。

『若草物語』出版から数十年後、オルコットと同じ小説家として身を立てていくウォートンが描いた小説世界の多くは、『若草物語』の登場人物と同年齢の女性を扱っているにも関わらず、自らが幼少期に親しんだ愛読書のテーマを完全否定するものであった。ヒロインたちは母親によってより良い家柄の男性に嫁ぐことこそが幸せになる道であると説得され導かれるが、最終的にその身は破滅するか(『歓楽の家』のリリー・バート)、人々の嘲弄を受けるか（『国の風習』のアンディーン・スプラッグ)、思い描いた結婚生活と異なる現実を諦観しつつ生きていくかのどれかにおおよそあてはまる。もっとも、ウォートンの小説はテーマ的にある程度の明快さが求められる児童文学のジャンルとは一線を画したリアリズムの世界を描い

ていることや、ヴィクトリア朝家庭小説の流れを組む『若草物語』よりも一世代後の時代の作品であることから、オルコットの掲げた家庭礼賛のテーマに逆らったものであることは驚くに値しない。

にもかかわらず、最近のウォートン研究においてオルコットとウォートンの類似性が指摘されていることもまた事実である。サラ・シャーマンは、『若草物語』と『歓楽の家』を比較し、「リリーの物質的欲望との葛藤を通して、ウォートンは、社会的ステータスを求めたり、見せびらかしの消費をしたり、商品を感情的で精神的な性質のものと混同する、マーチ家がまさに恐れていた行動を批判している」と指摘する（74）。また、ウォートンの母親の生家が『若草物語』の家族同様、父親不在で貧困生活を強いられていたことなど、ウォートンの家族にまつわる伝記的な事実と『若草物語』の内容を比較し、類似点を見出している。シャーマンによるオルコットとウォートンの類似性の指摘には斬新な面が認められるものの、テクスト分析のレベルでは『若草物語』と『歓楽の家』の比較にとどまっている点が残念であると言わざるを得ないだろう。『若草物語』のヒロインが四人「姉妹」である一方[2]、『歓楽の家』のリリー・バートが孤独な一人身であることを考慮するならば、例えば、姉妹がヒロインとして描かれているウォートンの他作品、中編小説「バナー姉妹」（1916）や長編小説『バカニアーズ』（1938）のほうが『若草物語』の比較対象作品として、より妥当といえるのではないだろうか。

本稿では、ウォートン小説の中でも姉妹をヒロインに取り上げている上記の二作品に関して、ヒロインとしての姉妹の描かれ方に着目する。「バナー姉妹」は、ウォートンが二人の姉妹をヒロインと設定した最初の作品であり、その発表は 1916 年だが、実際にはウォートンの創作活動のきわめて初期の頃、1892 年に完成していた（Wolff　63）。対する『バカニアーズ』はウォートン没後に発表された彼女の最後の作品である[3]。ウォートンの約半世紀にわたる作家活動の最初と最後に書かれたこの二作品につい

て、個々の作品に関する研究はこれまでにいくつかあるが、姉妹の描かれ方に特に着目したものはこれまでのところなされていない。そこで本稿ではヒロインとしての「姉妹」の描かれ方を『若草物語』と適宜比較しながら検証し、姉妹がヒロインであることの作品内での意味について考察をしたいと思う。

**ライバルとしての「姉妹」**

「バナー姉妹」は貧しく寄る辺のない、結婚適齢期をやや過ぎつつある未婚姉妹、アン・エリザとエヴリナの没落までの過程を描く、絶望的な物語である。きわめて狭く閉じられた空間内での貧窮した暮らしの中、一人の男性との出会いによって、この姉妹だけの小さな家族は徐々に転落し崩壊していく。『若草物語』のマーチ姉妹たちも質素倹約に励む暮らしぶりが描かれているが、マーチ家にはお手伝いのハンナを雇い、貧しい隣人に施しをする余裕もある、当時のアメリカ社会における中流階級の設定であり、バナー姉妹よりは暮らし向きはずっと良い。ただし、頼れる父親は従軍牧師として不在であり、家族は女性だけの心細い状況で物語は始まっている。バナー姉妹の状況はさらに悪く、両親ともに既に他界しており、そのため、年長のアン・エリザがイヴリナの姉であると同時に母親の役割を担いながら、一人二役をこなしている。二人は小さな店を開き、オルコットの小説でもしばしば登場する針仕事で細々と生計を立てている（ただし、『若草物語』では針仕事はあくまでも女性のたしなみであり、生計に結びついているわけではない）。

「バナー姉妹」の冒頭は、姉アン・エリザが妹イヴリナに誕生日プレゼントを渡す場面で始まる。『若草物語』の冒頭でマーチ夫人が人生の指南書となるように姉妹たちのクリスマスプレゼントに本を一冊ずつ与えるのと似て、姉であり母親でもあるアン・エリザはイヴリナに小さな時計を贈る。「去年の７月にお母様の時計を売ってしまってからずっと、晴れの日

も雨の日もあなたは毎朝、かどの広場まで何時か見に行かなくてはならなかったじゃない」(170) と妹を気遣うアン・エリザの行いは、亡き母親に代わって時計を贈ることで、妹が生きるこれからの時間の過ごし方を指南しているととらえるならば示唆的である。というのも、実際この小さな時計は、その売主、つまりイヴリナのその後の運命を決定的に変えることになる時計職人の男をこの家にもたらすことになるのである。

狭い人間関係の中でもそれなりに充足した暮らしを営んでいた姉妹（同種）の生活に、突然、外部から男性（異種）が入りこんでくる、という物語上の展開は、『若草物語』と「バナー姉妹」の両作品に共通している。前者では、イタリア人の母をもつ少しエキゾチックなローリー、後者では姉妹の店の「ほんのすぐ近く」にありながらも「これまでは目に留めたこともなかった」小さな店を構えるドイツ系移民の時計職人、ハーマン・ラミーである (171)。ローリーにはその年齢ならまだ必要であるはずの母親がなく、彼の住む「寂しい、ひと気のない家」の「窓辺では母親らしい顔つきが微笑むことは決して」ない (42)。寂しそうなローリーの様子を見たマーチ家のジョーは彼の家を訪ねて行って、彼の求めるものを自分たちが提供できると伝えている。「これからはカーテンを閉めないようにして、あなたが好きなだけ〔マーチ家の居間を〕眺められるようにするわ。でも、こっそりのぞくのではなく、うちにきて私たちの家族に会ってくれたらいいのに」(45)。ラミーにもまた、身の回りの世話をする伴侶はなく、時計を買いにアン・エリザが訪ねて行く店には「カウンターや棚を覆っている埃の層」が認められ、「彼の暮らしは間違いなく寂しいものであり」、店内に「たちこめる冷めた揚げ物のにおいは彼が自分で調理している」ことを物語っていた (173-4)。やがてローリー、ラミーともに、それぞれ自分にないものを求めて、前者はマーチ家の、後者はバナー家の居間を訪れ、姉妹の生活に深く関わっていく。

物語の進行と共に、ローリーはマーチ姉妹全員にとって欠かせない「兄」

であり「弟」となる。また、マーチ夫人にとっては彼女の花瓶に活ける「花束」をいつも用意してくれる「やさしい子」、つまり五人目の子供のような存在でもある（107）。そして実質上、ローリーが頼れる「息子」としての確固たる地位を築いていることは、従軍中の父親の危篤が知らされる非常事態に一番に呼ぶのがローリーの名前であることからも明らかである（144）。ラミーもまた、男性不在の心細い姉妹にとっては頼れる「兄」としての役割を担う。「取るに足らない女々しい疑問や悩みに揺れていた雰囲気の中に静かな男性の存在があるという感覚」を姉妹は有難く思い、判断の難しいことがあれば、「ラミーが来たときに聞く」のが習慣になっていく（188）。ここで重要なのは、ラミーが「静かな男性」であり、故に姉妹との意志疎通が完全ではないということである。にもかかわらず姉妹がラミーに殊更に肩入れするのは、二人が彼の人物像そのものではなく、パイプをくわえて寡黙な「男性」が自分たちの居間で寛いでいるという擬似的な結婚生活の状況を魅力的に思っているからにすぎない。そして、明らかにこの状況で男性一人に対し女性が二人いることの不自然性が、姉妹が互いに反目する理由となっている。だが、物語の中の姉妹にはこの時点でそれに気づく余裕はなく、やがては自分たちが稼いだ 200 ドルを預けるべき銀行を彼に相談するが、その金の存在を知られたことは、最終的にバナー姉妹をさらなる貧困に陥れる。

『若草物語』と「バナー姉妹」の表面上の類似点、すなわち、同質的姉妹が住む閉じられた空間に異質な男性部外者が入りこむという設定には、どちらも侵入者の男性が姉妹の一人と結婚する結末が用意されている。だが『若草物語』におけるローリーがマーチ家の人々全員にとって物心両面において利をもたらす存在であるのに対し、ラミーはバナー家に著しい不利益をもたらす悪人であることが判明する。この差異は、一方は児童文学作品であり他方はリアリズム小説であるという両作品が属するジャンルの違いによるものであることは言うまでもないが、ここではさらに踏み込ん

で、『若草物語』では決して描かれることのなかった、バナー姉妹の間に生じる嫉妬心にその原因を探りたいと思う。『若草物語』において、四人姉妹は時に反目し合うことはあっても、求愛する男性の存在が姉妹の対立の原因には決してならない。ローリーはもともと親密だった次女のジョーに結婚を申し込むも彼女の同意を得られず、最終的に四女エイミーを選ぶ。しかし、ジョーとエイミーは互いにローリーをめぐって嫉妬の感情をもつことはない。これに対し、「バナー姉妹」ではラミーが登場したときから姉妹の間には目に見えない溝ができ、読者はそれをアン・エリザの視点から主に知らされる。もともと妹思いのアン・エリザは、婚期を逃して細々と暮らす「自分の運命についてはもう長い間受け入れることができていたが、イヴリナのことは別だと思い」、彼女の幸福を希求する（176）。しかし、ラミーと出会ってから、彼女は「これまで失っていた機会を取り戻す権利が自分にもあるはずだとついに認識」するに至り、そこが、アン・エリザのイヴリナに対する感情に変化が生じる分岐点となっている（177）。やがて彼女はラミーと親しく振る舞う妹を見て、彼女の「媚びたように顔を傾けるしぐさが、その引っ込んだ顎を惜しいことに強調してしまっている」と意地悪く思う。そして同時に、このように初めて妹の美しさに欠点を見つけたのは「密かな背信行為」のように彼女をはっとさせるのである（187）。ラミーの来訪にあわせてイヴリナが用意した花を彼が褒めるとき、二人が見つめ合っているのをアン・エリザは「この瞬間、どこか遠い田舎に行きたい」と思いながらも狭い室内に至近距離で見ていなくてはいけない（190）。ラミーが姉妹を遠出に誘えば、一緒に出かけて行き、二人が仲良くするのを間近で見ながら疲れて帰ってこなくてはならない（191）。そしてあるとき、ラミーは、イヴリナの留守中にアン・エリザを訪れ、彼が結婚したいのはアン・エリザのほうであることを伝える。妹思いの姉として、アン・エリザはラミーの突然のプロポーズを断るが、男性からの初めての求愛を「夢のようなエクスタシーの状態で」反芻し、「自

分たち姉妹がついに対等になったことを知らない」イヴリナは鈍くて少し頭がおかしいのではないかとさえ思う（204）。しかしながらここで「おかしい」のは、ラミーのプロポーズを断りながら妹に優越感を抱くアン・エリザの判断能力である。ラミーは、普段はイヴリナと親しくしながら彼女の留守中にアン・エリザにプロポーズをした。そして断られればすぐにその矛先を妹に向ける節操のない男性なのだ（実際、イヴリナと結婚後、ラミーは彼女を捨て別の女とどこかへ消えていく）。にもかかわらず、アン・エリザは、女性として自分もイヴリナと「対等になった」ことへの喜びから、本来ならば気づくはずの彼の本性を批判的に見ることはない。

ラミーが姉妹たちに著しい不利益をもたらす悪人かもしれないということは、実は物語の始まりからずっと示唆され続けている。彼の容貌は、「病んでいる」顔つきで、その「黄ばんだ歯」には隙間があき、頬はくぼんでいる（171, 182）。本論でも前述した彼の店にたまっている埃も、アン・エリザにとっては、不便を強いられた独身男性という、姉妹たちの結婚願望を満たす都合のよいサインとして機能する。それでも、イヴリナがラミーといよいよ婚約し、結婚も間近となると、アン・エリザは徐々にラミーへの違和感と疑いを察知するようになる。結婚前に突然転職・転勤することや、それに伴う金の無心に対して、アン・エリザはイヴリナに「〔お金が必要なことは〕前からわかっていたのではないのかしら？」と少しばかり彼を否定的に評価するが、ラミーに関することでは常に姉と対立するイヴリナは取り合わず、最終的にバナー姉妹の貯金はすべて結婚費用としてラミーに渡ってしまう（207）。イヴリナの結婚後、事態は急速に悪化する。結婚後に行方不明となったイヴリナを探して翻弄するアン・エリザは、ラミーが麻薬常習者であったこと、経歴を詐称していたことを知る。イヴリナは肺結核を患った状態で姉のもとに逃げ帰り、まもなく死に、一人になったアン・エリザは店を閉めてあてもなくさまようところで物語は幕を閉じる。姉妹は異質な侵入者ラミーによって、親密だった家族内の関係の悪化

を余儀なくされ、最後は自滅する。

「バナー姉妹」で描かれた、二人の姉妹が同じ男性を好きになり、一方がその男性を獲得し、他方が苦悩の末、男性を諦めるという筋書きは、その後のウォートン作品の中で繰り返し描かれることになる定番のモチーフであるといえるだろう。直接の「姉妹」でなくとも、血のつながった従姉妹が一人の男性をめぐって争う構図は、例えば、『イーサン・フロム』におけるイーサンをめぐって対立の関係になる妻ジーナとその従妹マティ、『無垢の時代』におけるニューランドをめぐるエレンとメイの関係にみることができる。また、『トワイライト・スリープ』（1927）に登場する善良な妹ノラもまた、敬愛する異父兄ジムを、結婚により義姉となったリタに奪われた上に実父に寝盗られるのを目の当たりにし、心身ともに深く傷つく。この場合、リタとノラはもともと他人であるが、ジムの結婚を通して制度上の義理姉妹となっている。そして短編「ローマ熱」（1934）では、同じ男性を好きになった姉妹のうち、姉が妹にあえて夜に咲く花を摘みに行かせた結果、妹は風邪をこじらせ死んでしまうという挿話が語られるが、このことは、主要登場人物のグレイスとアリダが過去に同じ男性を好きになったこと、そして、二人のそれぞれの娘たちであるジェニーとバーバラが実は異母姉妹であったという最後に知らされる真実の伏線として機能している。このように、「バナー姉妹」のアン・エリザとイヴリナは、それから数十年、ウォートン作品の中でその姿を少しずつ変えながら何度も登場し、原型ともいえる姉妹像を提示していると言えるだろう。姉妹あるところに嫉妬心あり。『若草物語』に描かれた家族愛の一種としての姉妹愛は、ウォートンの手にかかれば、一人の男性の出現によって脆くも崩れ去る、はかない絆でしかないということになるだろう。

## 共闘する「姉妹」

「バナー姉妹」の構想から約半世紀後、ウォートンは後に遺作となる最

後の作品『バカニアーズ』で、再び姉妹たちが主人公となる物語を手掛けている。貧困にあえぐバナー姉妹とは異なり、『バカニアーズ』は、アメリカの新興成金の娘たちがアメリカ国内での社交界に入りこむ余地を見出せず、海を渡ってイギリス貴族に嫁ごうとする、女性版「海賊」たちによる一種の冒険物語として読むことができる。テーマ的に、アメリカの新興成金とヨーロッパの貴族が相互に欠けているもの—すなわち貴族の称号とそれを維持する多額の資金—を結婚によって交換する現象を扱っていることから、この小説に関するこれまでの研究では、主にヒロインの結婚をめぐる苦悩そのものが中心に論じられてきた[4]。しかし、新興成金と没落間近の貴族の結婚というテーマ自体はウォートンの作品群の中では特に珍しいものではない。『バカニアーズ』がユニークなのは、そのテーマよりもむしろ、複数のヒロインの多様な生き方を示すにあたり、『若草物語』同様、四人「姉妹」のヒロインを採用した、その設定にあるといえる[5]。

四人姉妹とは言っても、『バカニアーズ』の姉妹は同じホテルに滞在する二組の家族の二人姉妹、すなわちセイント・ジョージ家のヴァージニア、アナベル姉妹、そしてエルムズウォース家のリジー、メイベル姉妹である。両家とも、父親が投機で儲けた莫大な富で娘たちの玉の輿を狙おうとするが、ニューヨークの上流社交界では新興成金である二組の姉妹は社交界入りの機会を得られず、母親たちはそのことを憂えている。『若草物語』において母親は姉妹たちの人生の指南役であったが、『バカニアーズ』の母親の場合、資本は出せても指南はできない。マーチ夫人と異なり、『バカニアーズ』の母親たちは娘たちを自分の社会的地位よりもさらに高く引き上げなくてはならないため、自身が娘の手本にはなれないのである。そこでセイント・ジョージ家ではイギリス貴族に長く仕えていたミス・テストヴァリーをガヴァネス派遣協会から雇い入れ、娘たち（特に下の娘アナベル）の教育に投資する。こうして金で買われた指南役だが、ミス・テストヴァリーはアナベルを「私自身の娘だったかもしれない」とさえ思うほ

どに彼女を愛しみ、母親代理としての役割を全うする（90）。そしてもう一人、ミス・テストヴァリーの旧友としてイギリスへ渡った四人の姉妹たちを導くアメリカ人女性の名前がジャッキー・マーチであるということもここで強調しておくべきだろう。かつてイギリス人貴族に婚約破棄されたマーチ女史は、独身女性としてイギリスにとどまり、「社交界の扉を求めて大西洋を渡って来る巡礼者たちの指南役」をつとめてきた（99）。『天路歴程』の巡礼者に例えられる『若草物語』の四人姉妹が母マーチ夫人を指南役としてそれぞれの幸福を追求していくように、『バカニアーズ』の姉妹たちも巡礼地イギリスに赴き、同胞のアメリカ人、マーチ女史に導かれているのは、偶然にしてはよくできた設定ではないだろうか。

『若草物語』や「バナー姉妹」に登場する外部からの侵入者は隣人で同年代の男性という設定であったが、『バカニアーズ』でその役割を果たすのは、同じホテルに滞在する同年代の女性、コンチータ・クロッソンだろう。ヨーロッパの血を感じさせるローリーやラミー同様、ブラジルの農園からやってきたエキゾチックなコンチータは、自らがイギリス人貴族のリチャード・マラブルと結婚することで、テストヴァリーとマーチ女史とはまた違った立場から、二組の姉妹たちに、イギリス貴族との交流の機会を提供し、新たな世界へと導いていく。例えば『若草物語』においてローリーを通して、彼の家庭教師ジョン・ブルックがマーチ家の長姉メグと出会い、最終的に彼女と結ばれるように、『バカニアーズ』でもコンチータを通して彼女の義理の兄シーダウンがセイント・ジョージ家の長姉ヴァージニアと知り合って結婚し、コンチータはヴァージニアと義理の姉妹の関係になる。

外部からの侵入者が姉妹にとって異性でなく同性であることは、『バカニアーズ』の姉妹たちが「バナー姉妹」で描かれたような姉妹間の嫉妬心と苦悩から解放されていることと無関係ではないかもしれない。むしろ『バカニアーズ』の斬新な点は、コンチータを含めた五人の女性たちがお目当

ての男性のために嫉妬と反目に翻弄されるのではなく、結束、協調し、共闘することで自分たちの目的を果たそうとするところである。コンチータが五人の中でいち早くイギリス人貴族を射止めたことで社交パーティーに招待されることになると、他の姉妹たちはコンチータの衣装の「フリルやリボンを、まるで自分たちの装飾品の一部であるかのように」気にかけ、彼女の周りを「楽しげにまわっている」。それを見たミス・テストヴァリーは彼女たちの「明るい顔つきに羨ましさの痕跡が見えないことに感銘を覚える」のだ（72）。ライバルではなく先導者であるコンチータについてイギリスに渡った姉妹たちは、多少の小競り合いはあってもやはり、敵対するのではなく助け合う同士としての立場を貫いている。実際、『バカニアーズ』が未完にもかかわらず出版に値するだけの価値があることを示す名場面の一つと言われるのが、ヴァージニア、リジー、コンチータの三人が結束してイギリス人女性イディナ・チャートからシーダウンを奪いとるシーンである（Wolff 386）。この場面のクライマックスで、ヴァージニアと同じくシーダウンとの結婚を望んでいた「友人でありライバルでもある」リジーは、シーダウンを自分の恋人だと主張するイディナを前に、ヴァージニアに向かって「シーダウン卿に、あなたたちが婚約をしたこと、もう公表しても良いと言ってあげなさいよ」とけしかける（207）。これに対し、シーダウンがヴァージニアの「震える手」を握りしめて彼女との婚約を、イディナを含めその場にいた全員に公表するのだが、その際、「ヴァージニアはもう一方の手でリジー・エルムズウォースを引きよせ」、「おお、リジー」とつぶやくのである（208）。ヴァージニアにとって今こそ人生の山場、シーダウンを射止めることが何にも増して重要である一方で、異国のイギリスで同胞のリジーとのライバルを超えた友情も等しく重要なのだ。バナー姉妹がラミーを間に挟んで嫉妬とライバル心のために姉妹関係をこじらせ、結果として二人ともが転落していくのに比べて、『バカニアーズ』のヒロインはこの点に関してずいぶんと合理的であり前向きである。実

際、自身を犠牲にしてヴァージニアを助けたリジーには、この場面の一部始終を見ていた、イギリス社交界の中でも新興成金の部類に属するヘクター・ロビンソンが結婚を申し込む。リジーは当初目論んでいた高い地位を結婚で勝ち取ることこそできなかったが、男性版「イギリス人バカニアー」と称される野心家の夫と共に、伝統に縛られる結婚生活を捨てて自由を希求するアナベルに一時的な避難所を提供しようとしているところで物語は終わっている[6]。

未完で出版された『バカニアーズ』の姉妹たちがそれぞれどのような結末を迎えるはずであったのか、我々は知ることもなければ、憶測することもできない。とはいえ、少なくとも、物語の枠組としてウォートンが用いた、複数のヒロインたちが家族として遠からず結びつきながらそれぞれの人生を歩むという設定は、彼女が幼少時に慣れ親しんだ『若草物語』同様、姉妹たちが結束して自分たちの欲するものを手に入れるために邁進するひたむきな姿勢を描きだす上で有効な手法であった。ウォートンの姉妹描写はともすれば特定の男性を対象に女性同士の嫉妬と争いに力点が置かれる傾向があったが、遺作となった『バカニアーズ』を読む限り、そこに、晩年のウォートンが女性たちの関係を描くにあたって新たな試みを示そうとしていたことがうかがえる。

## 注

1. 本論文の研究は科研費（「イーディス・ウォートンの小説におけるイメージとしての少女」、研究代表者 高木成美、研究課題番号 16 K 02519）の助成を受けたものである。
2. 姉妹の中で順位を付けるならは次女のジョーが最重要人物ではあるが、本論では、「姉妹もの」を取り上げた作品すべてに関して、複数のヒロインとしてとらえることにしている。
3. 1993 年、マリオン・メインウェアリングによって、『バカニアーズ』の未完部分は書き加えられ、完成した作品としても読むことができるようになっている。しかし、

本稿では扱っているテーマ内容を考慮し1938年出版の未完の書のみを参照し、完成版への言及はしていない。

4. 例えば、ドーソンの研究では、『バカニアーズ』の姉妹たちの中でも最重要登場人物であるアナベルを取り上げ、彼女がイギリス貴族との結婚に順応できなかった原因を、彼女がアメリカ人でもなく、ヨーロッパ人でもない、国際人たろうとし、その限界を見たことについて論じている。
5. 厳密には『バカニアーズ』の「姉妹」はコンチータ・コロッソンを加えた五人ということもできるが、本稿では、コンチータをあえて外部からの侵入者という位置づけにしている。
6. Hormer and Beer. pp.145-146.

## Works Cited

Alcott, Louisa May. *Little Women and Good Wives*. 1868-71. London: J.M. Dent & Sons, 1970.

Dawson, Melanie. "The Limits of the Cosmopolitan Experience in Wharton's *The Buccaneers*. *LEGACY* 31.2 (2014): 258-80.

Horner, Avril, and Janet Beer. *Edith Wharton: Sex, Satire and the Older Woman*. New York: Palgrave, 2011.

Rhys, Grace. Introduction. *Little Women and Good Wives*. By Louisa May Alcott. London: J.M. Dent & Sons, 1970.

Sherman, Sarah Way. *Sacramental Shopping: Louisa May Alcott, Edith Wharton, and the Spirit of Modern Consumerism*. Durham: University of New Hampshire Press, 2013.

Wharton, Edith. *A Backward Glance*. 1934. *Edith Wharton:Novellas and other Writings*. New York: Library of America, 1990.

————. "Bunner Sisters." *Edith Wharton: Collected Stories 1911-1937*. New York: Library of America, 2001.

————. *The Buccaneers*. 1938. New York: Penguin Books, 1994.

Wolff, Cynthia Griffin. *A Feast of Words: The Triumph of Edith Wharton*. New York: Oxford UP, 1977.